キッド

大通りで男の怒声が聞こえた。
「そいつらを捕まえろ！」
男の少し先に、大通りの人込みをすり抜けながら女が２人逃げるように走っていく。
周りの人々は女達の首元に黒いテープが張ってあるのを見ると、咄嗟に女達を抑え込んだ。女は必死に暴れて逃げ出そうとするが、周りの人たちも必死に抑え込んだ。
その後直ぐに怒声を発した男が来た。
「逃げ出すなんて、なんて奴らだ！　さっさと戻るぞ！」
男は１人の女の手を乱暴に掴んだ。
「離せ！　私達が何をしたって言うんだ！私達にだって感情があるんだ！」
手を掴まれた女は怒鳴った。
「……どうしようもないな。仕方ない」
男はその女の首元に手を近づけた。女は必死に暴れるが、抑えられているので逃げることができない。
「お願い！　やめて！」
もう１人の女が叫んだ。それでも男は女の首の裏にあるスイッチを押した。と同時に女は死体のように動かなくなった。
「あ……ああ！　そんな！」
もう１人の女は泣き叫んだ。
「お前は、どうする？　戻るのか？」
「……嫌です」
「お前も処分されたいようだな」
男がそう言った瞬間、大通りにいきなり白い霧が現れた。男も女も、その場にいた全員が騒然とする。そんな霧の中、１人の人間の少年が女の手をひいて大通りを颯爽と走り去った。
「奴がいないぞ！　逃げられた！」
周りが気づいた時には既に遅く、大通りに女の姿はない。男は舌打ちをし、動かない女を抱え、大通りを去っていった。
「やっぱりロボットに感情なんて要らなかったのよ！　変に知識や情を持つからこんなことに……」
「昨晩も工場からロボットが逃げ出したそうよ……」
「このまま奴らが成長すると、我々人間を滅ぼし、奴らが人間と名乗る時代がくるかもしれにわ」
「フン。そんなことある訳がないだろう」
人々はヒソヒソと話し始めた。

大通りを抜けた女と少年は、人通りの少ない路地まで走った。
「あの、あなたは……？」
女は恐る恐る尋ねたが、
「今は安全な所に行くのが最優先だ。とりあえず首元を隠しながらついてこい」
少年は女に目もくれず、どんどん路地を進んでく。２人は、路地の奥にある今にも壊れそうな小さな家に入った。
「とりあえず、ここまで来たなら大丈夫か……」
少年は家の奥へと進んでいく。女も少年についていった。少年は一番奥であろう部屋に入ると立ち止まった。部屋の中はたくさんの色んな本が散らばっていて、その真ん中に揺り椅子に座りながら本を読んでいる男性がいた。
「また厄介なのを連れてきたね」
男性は本を閉じると、こちらを向いた。
「とにかく人材が必要だからな」
少年は女の方へ向き直った。
「ようこそ。革命軍へ」
少年は言った。
「か、革命軍……？」
「といっても、革命軍とは名ばかりで、そこの少年の個人的な復讐

を手伝わされる会だ」
男性は冷やかすように言った。
「うるさいな、黙っていてくれ。とにかくだ、今日からお前もここの一員だ」
「ちょ、ちょっと待って！　そんな事いきなり言われても。それに個人的な復讐って」
女は戸惑いを隠せずにいた。
「ロボットに復讐するんだよ」
「ちょっと待って。い、意味が分からない。私はロボットだよ？」
女は更に戸惑った。それでも少年は冷静に話し続けた。
「お前は僕が言うロボットではない。正確にはロボット作られたロボットだ。その中でも奴隷認定され、あいつらの言う人間から除外されたロボット。僕たちはお前のようなロボットをキッドと呼んでいる」
「ロボットによって作られたって、一体……」
「お前が人間だと思っていたのはロボットだったってだけの話だ。あいつらは１５０年前に本来いた人間を滅ぼし、人間を名乗り、そして奴隷とするためのロボットを作り出した。それがお前達だ。まぁ、今いる大半の人間を滅ぼした後に作られたロボット達は自分を人間だと信じているよ。人間を滅ぼしたことを知っているのは、上層部の旧型ロボットくらいだな」
「そんな……」
「だがな、人間は少し生き延びていたんだ。僕の祖母達にあたる人たちが、密やかに子を産み、またその子が子を産んだ。それが僕にあたるわけだが」
「子を産む……？」
「あぁ、そうか。ロボットにはそういうのが無いのか。まぁ、作られたってことだ。そして、僕を作った製作者達は自分で対ロボット用のロボットを作り、ロボットと戦った。
が、結果は敗れ、製作者達は殺された。そして、旧型の奴らは、人間が生き延びていることを知り、僕たちを今もなお探し続けている。ここまでは大丈夫か？」
「え、えぇ。なんとか。……じゃあ、あなたが本来の人間ということなのね。あなた以外に生き延びた人間はいないの？」
「２人いる。それ以外はどこか他で隠れているかもしれないが、とりあえず今は僕を含めた三人だけだ」
「そう……。えーと」
女は、揺り椅子に座ってまた本を読み始めている男性に目をやった。
「あいつは、僕の製作者達が作った対ロボット用ロボットの生き残りだ。他にも、この軍には旧型の中でも人間が好きだったロボットや、お前のようなキッドがいる」
「良かった、上手く逃げ出せた人が他にもいるのね」
「お前達は、奴隷として酷い扱いを受けているよな、どうする？革命軍に入って旧型ロボットに操られているこの世界を変えるか、また奴隷として生きていくか」
「私は……」
女は決意した。
「革命軍に入ります」